

みやぎ生協

築こう未来、 希望の明日へ

みやぎ生協では、地域産業や被災者の支援に継続して取り組み、協同のある地域づくりをすすめました。

ボランティアセンターの「ふれあいお茶会」は、2011年からの累計が1,728回で49,188人の参加となりました。

また、被災者の手作り商品を販売する「手作り商品カタログ」を6回発行し、販売支援を行っています。

昨年9月には「ボランティア活動のふり返りとこれからの会」を開催し、支援いただいている全国の生協の皆さん、仮設住宅やボランティアサポーターの皆さんなどが集まり、これまでのふり返りとこれからの活動について考えました。

また、買い物支援として配達料を減額する「共同購入被災者支援サービス」や「お買い物代行サービスふれあい便」「移動販売車せいきょう便」を継続しています。

4年が経過し、震災の記憶は風化しつつあります。これを防ぐため全国の生協やメンバーへ情報発信を行うとともに、被災

者や復興への支援を継続していきます。



被災者の手作り商品のカタログ



「ボランティア活動のふりかえりと
これからの会」の様子

(機関運営課課長 稲葉勝美)

生協あいコープみやぎ

誰もが安心して暮らせる 地域社会づくりへ

東日本大震災と福島原発事故から4年が過ぎようとしています。県民は力を合わせて復興へと一歩ずつ歩みを進めています。しかし一方で、生活再建の目途が立たない方も多く、特に医療・介護サービスを必要としている方々は厳しい暮らしが続いています。

そんな中、国は介護保険制度を改定し、行政が様々な市民セ

クターをコーディネートし支援しようという「地域包括ケアシステム」の構築へと舵が切られました。生協も地域支援サービス事業の担い手として大きく期待されています。

あいコープみやぎは、震災を機に石巻市渡波で地域サロンとして立ち上がり介護事業施設へ発展している「よってがいん」の活動に参画してきました。地域の人々が自分たちの手で拠り所となる居場所を作って継続できるようにと支援してきました。ともに歩んできたこの経験は、今後も活かしていきたいと思っています。

誰もが住み慣れ親しんだ場所で安心して暮らせる地域社会をつくるために、組合員や地域の人々が主体的に活躍できるような居場所づくりに取り組んでいきたいと思っています。



「よってがいん」で懐かしの味噌作り

(理事 鈴木智子)

東日本大震災から4年

食のみやぎ復興ネットワーク

これまでのとりくみと 今年度の活動

震災の年の7月に設立された食のみやぎ復興ネットワークは、被災生産者への作業支援活動、全国からの支援のつなぎ、農地復旧を応援する商品活動などを通じた被災地支援活動に取り組んでいます。

塩害を受けた岩沼沿岸部で、菜種栽培に取り組む生産者を応

援する「なたねプロジェクト」には、28団体 33,000人が活動に参加し、イベント開催や開発商品の販売を通じて、地域を応援しています。岩沼に広がる菜の花畑は春の風物詩として地域に愛されています。

仙台の伝統作物「仙台白菜」の復活を通じて宮城の農業復興を応援する「仙台はくさいプロジェクト」は、多くの団体に支えられ震災復興のシンボルに育ちました。

震災後、亘理郡で始まったソバ栽培を応援する「わたりのそ

ばプロジェクト」では、商品化した復興亘理そば（生麺タイプ）が、年末の短期間で1万パックの利用が集まりました。3月には乾麺タイプも登場しました。

ネットワーク参加団体による被災地支援活動「ふるまい企画」では、のべ814団体が681企画を実施しました。

2015年度もこの活動を継続し、宮城の復興を応援し続けます。

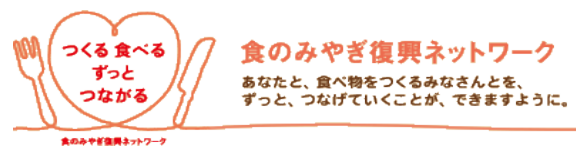
(事務局 藤田孝)



なたねプロジェクト 5月8日「菜の花を見る会」



わたりのそばプロジェクト 9月12日「花見会」



仙台はくさいプロジェクト 11月16日「収穫祭」



参画団体 2015年1月10日現在 [236団体]

松島医療生協

新しい「ふるさと」を 一緒につくろう

[2014年度の被災地支援活動]

松島町では、被災地から松島町へ転居された方の集い「まざらいん会」を年2回開き、延べ7回開催しました。軽い体操やゲーム、歌う会、松島探検ウォーキングなどを行いました。

東松島市の在宅の被災地（野蒜・牛網・赤井）では、認知症予防、口と歯と健康、体操や歌

など行っています。

グリーンタウンやもとと鷹らの森仮設住宅の集会所では、毎月第一・第三の日・月曜日の月4回、みやぎ生協と一緒に「ふれあい喫茶」で健康チェックを続けています。復興住宅や集団移転地に自宅を建て転居して行く方も多く、参加者が少なくなってきたおり、「新しいふるさと＝転居先」での「ふれあいの場」が期待されています。

石巻市では、みやぎ生協蛇田店での「ふれあい喫茶」に、毎週木曜日に健康相談で参加しています。これまで175回開催し

健康チェックは延べ5,300人に達しています。毎回30人前後の参加者がおり、被災者の多い石巻市向陽町に「医療生協の被災者支援センター」の開設に向けて準備を進めています。



12月7日みんなで一緒「まざらいん会」

(被災地支援担当職員

小野潤一)

みやぎ県南医療生協

医療生協だからできる 支援活動を！

2014年度の山元町被災地支援活動は、仮設住宅、坂元地区、沿岸部（牛橋区、花釜区）、新山下災害公営住宅の5か所で、健康サロン（茶話会、健康チェック、脳トレ、ゲームなど）の定例支援を行いました。（年間44回開催）また、男の料理教室（秋刀魚料理）、炊き出し（カレー、秋刀魚焼き）も現地の皆さんと一緒に開催しました。

10月に開催した「やまもと

花釜まつり」では、旧山下駅前ひろばで、山元町のみなさんのステージ発表や、神戸、大阪の医療生協の出店協力、全国の医療生協からの名産品の提供もあり、400人の参加で楽しい一日を過ごしました。

仮設住宅から再建した自宅や、災害公営住宅への転居と、あらたな生活への不安からくる「心と体のケア」が、ますます必要になってきています。

被災地のみなさんの苦難を少しでも和らげ、医療生協だからできる「健康づくり」を中心に医療生協の専門性やネットワークを生かし、今後も細く長い支援を続けていきたいと思ひます。



健康チェックで思いを共有します
(ナガワ仮設での健康サロン)



手品でみんな笑顔に
(災害公営住宅での健康サロン)

(常務理事 児玉芳江)

大学生協東北事業連合

東北地区大学生協の震災復興活動のとりくみ

東北地区大学生協では、震災直後からの宮城県内各地での被災地支援をはじめ、宮城・福島・岩手への被災地訪問や七ヶ浜町での学習支援等に取り組んできました。

この間の成果として、東北ブロック事務局や事業連合による取り組みにとどまらず、各大学生協が主体となった取り組みへと成長してきたことです。例えば、福島大学生協では南相馬市

で子どもたちとのふれあい企画を、岩手大学生協では釜石市の仮設住宅訪問や宮古市・山田町の被災地域案内を、東北大学生協では防災意識を高めるための防災フェスタの開催や、生協の各組織委員会合同による被災地支援企画に取り組んできました。いずれも学生が中心となって、企画をすすめていることが特徴です。

そして、震災 4 年目を迎えるにあたり新たな活動フィールドとして、「食のみやぎ復興ネットワーク」の活動への参加をすすめています。また、これまで取り組んできた被災地訪問や、全国大学生協連とともに企画す

る七ヶ浜や名取への支援活動にも、取り組んでまいります。



南相馬市の子どもたちとのふれあい企画



宮古市田老の防潮堤にて

(大学生協東北ブロック事務局長 田中康治)

みやぎ仙南農協

JA みやぎ仙南丸森地区産直部会のとりくみ

東日本大震災から 4 年が経とうとしています。この間、丸森町では、東京電力福島第一原子力発電所事故による放射能の風評被害を脱却すべく、様々な取り組みをしています。

JA みやぎ仙南丸森地区産直部会では、安心して安全な野菜を身近で感じてもらうと、毎年 4 回、みやぎ生協のメンバーさんと交流会を行っています。

今年度は丸森町からの助成も受けて、交流会の回数を倍の 8 回に増やし、積極的に活動をしました。具体的には、野菜の収穫体験や、料理教室、川遊びなどを通して実際に野菜を作っている畑や身近な自然に触れ合うことで、多くのメンバーさんや子どもたちと、交流を深めました。

メンバーさんたちからは、「丸森の魅力を感じ、今度また丸森に出かけたいと思った」「丸森の野菜が安心・安全であることを実感した」「生産者の大変さや工夫が分かり、野菜に対する気持ちが変わった」といった声をいただきました。

今後もこのような交流会を通じて、丸森で作られる野菜の安心・安全を発信していけたらと思います。



ブロッコリー収穫体験にて

(営農経済部部長 小林潤一)

東日本大震災から4年

東北大学生協

震災から4年 防災意識の持続

東日本大震災から4年目の春を迎えようとしています。

大学は平穏を取り戻しつつありますが、それとともに、あの日の出来事が忘れ去られ、風化しつつあるのではないかと危惧します。この春、震災年に入学した学生は卒業し、キャンパスのなかから次第に震災の記憶が薄れていくように感じます。

東北大学生協では、2011年度

通常総代会において震災復興基本方針を決定し、「今回の震災を教訓に、つぎの激甚災害への備えを用意するとともに、東北大学とともに防災訓練を実施し組合員の防災意識を啓発する活動をすすめます」を課題のひとつに掲げました。

これをうけて、2014年度は6月12日(木)に「防災フェスタ」と称し、震災パネルの展示や非常食の試食を実施しました。大学の防災訓練時には、非常食の試食を行い、防災意識の持続に努めました。また、被災地で買い物をを行うことで復興支援を行う取り組みも、組織委員会が

中心となって毎年継続して行っています。

2015年度は、震災の記憶を次の世代につなげ、防災意識を持続させる活動を、組合員と共にすすめていきます。



(専務理事 峰田優一)

東北学院大学生協

ドキュメント After 3.11

「ドキュメント After 3.11」は、2012年3月「東北学院東日本大震災アーカイブプロジェクト」が、東北学院全法人的な取り組みとしてスタートし、その取り組みの一つとして2014年3月11日に発行された本のタイトルです。

学院大の組織の記録編として大学生協の記録も載せていただいたことに、深い感慨を覚えます。

震災直後は、親族や友人を失った学生委員も多くいて、震災にどう向き合っていけばいいのか語り合うことも出来ず、また活動に繋がられない雰囲気もありましたが、最近は学生委員の中から自主的に震災の記憶を風化させない取り組みも出てきました。当時の被災状況を、POPやポスターで知らせる活動をする姿に、あれから4年という思いになります。理事会で決議した「未来の学生応援募金」は、全店での取り組みになっています。

「After 3.11」の本の帯には、詩人である和合亮一さんの詩が載せられており、最後に「あな

たのあしあとを わたしのあしおとに」と結ばれていますが、生協としても“知り・知らせる・支援する取り組み”を、継続していきたいと考えています。



震災を風化させないためのポスター(左)
「After 3.11 東日本大震災と東北学院」(右)

(専務理事 細畑敬子)

宮城労働者共済生協

最後のおひとりまで

あの東日本大震災から4年の月日が経過しました。全労済では発生直後より、被災者に一日も早く共済金・見舞金をお届けしようと、全国の職員を動員して対応を行ってきました。

2014年12月末の共済金・見舞金支払い状況は、全国では345,868件で126,207,253,708円、宮城県では91,351件で

47,607,654,819円となり、生活再建にお役立ていただいておりますが、現在も新たな被災受けもあり引き続き対応を行っています。2013年度末(2014年5月末)から2014年12月末までの7ヶ月間では、全国では1,637件で524,334,508円、宮城県では131件で44,222,769円の共済金・見舞金を、新たにお支払いしています。全労済宮城県本部では、今後も文字通り「最後のおひとりまで」を合言葉に、被災者対応を行っていきます。

また、住まいへの新たな保障

として、2015年2月より「住まいる共済(新火災共済・新自然災害共済)」を発売しました。

パワーアップした保障を、組合員の皆さまに提供していくとともに、未来に向けた防災・減災の活動も継続的に行っていきます。(専務理事 畑山耕造)

2014年の主な防災・減災に向けた活動

- 未来のとうほく創造フォーラムに協賛「防災から減災へ」
月日: 2014年9月17日(水)
場所: 電力ホール
- 「ぼうさいカフェin宮城」の開催
月日: 2014年10月26日(日)
場所: 勾当台公園いこいの広場
内容: 震災写真パネル・防災グッズの展示、非常食の試食
(「第20回わいわい祭」へのブース出展)

宮城県高齢者生協

2014年の復興支援のとりくみ

《2014年のとりくみ》

(1) 3月8日(土) 泉区「原発ゼロをめざす泉区民行動」で宣伝署名活動や集会に参加しました。東北電力仙台北営業所に「女川原発の再稼働をしない」要請行動にも参加しました。その後、毎月第2火曜日は、「女川原発の再稼働に反対」する宣伝署名活動に取り組んでいます。

(2) 3月30日(日) 石巻市で

「震災体験と復興を語り伝えるつどい」を開催し、各県高齢協から55人が参加しました。翌31日(月)は、浪江町と南相馬市の原発被害地を視察しました。

(3) 9月28日(日) 石巻市で「震災復興支援ツアー」を開催し、福岡県高齢協からの17人をはじめ、各県高齢協から55人が参加しました。翌29日(月)は、南相馬市と浪江町の原発被害地を視察しました。

(4) ひなたぼっこ石巻において、被災地「石巻の産品」を全国に紹介・販売する取り組みを行っています。

今年は、3月28日(土)に石巻市渡波地区で、水産・加工業の皆さんの復興への取り組みを視察、交流する震災メモリアル企画を計画しています。また、9月には「復興支援ツアー」を計画し、今後も継続した取り組みを行っていく予定です。



「復興支援ツアー」(石巻市日和山にて)

(専務理事 山田栄作)